

## 目で歩く江戸 江戸切絵図の世界

江戸切絵図とは

江戸時代末期に携帯用に作成された、折りたたみ式の分冊江戸地図です。幾つかの版元から出版されていますが、本学に蔵するのは江戸の版元、金鱗堂尾張屋清七の刊行になるものです。大名屋敷には家紋を入れるなどの工夫が凝らされ、木版多色刷りによる美しい色彩が目を楽しませてくれます。



時代小説作家と切絵図

たとえば、『剣客商売』ほかで有名な池波正太郎は、大の江戸切絵図の愛好家でもあったようで、...地域別につくられ、携帯に便利な〔切絵図〕は、私のような、江戸期を舞台にした時代小説を書いている者にとっては、欠かせないものだ。私は〔切絵図〕と共に毎日を送っているといつてよい。（『江戸切絵図散歩』新潮文庫）とまで語っています。

また、作品の映画化等で没後もお人気の衰えを見せない藤沢修平も、... 現在の江東区は、このように私にとってはほとんど未知の都市にひとしい場所なのだが、しかし、私の頭の中には、これとは異なるむかしの江東区、深川の地図が一枚おさまっていて、こちらの方なら、私はいささか地理にくわしいかも知れないという感じを持っている。（『深川江戸散歩』新潮社）と切絵図を通して、深川への愛着を語っています。時代小説作家にとって、江戸の町並みを髣髴とさせる切絵図の世界は、私たち以上に身近なものであるようです。

江戸切絵図ガイド

江戸切絵図の描かれ方には、いくつかの約束事があります。参考までに、いくつかご紹介しておきましょう。

1. まず図中に方位が記されていますので、御覧いただければお気づきになると思いますが、題にあわせてまっすぐ置いても、今日の地図のように上が北と決まっているわけではありません。
2. これもしばしば図中に記されるごとく、赤が神社仏閣、黄色が道や橋というように、色によってその区域がどのような場所であるかが判るよう工夫がなされています（右の図参照）。

また、大名の上屋敷（藩主やその家族が住む公邸）は家紋により表されていますし、中屋敷（隠居した藩主や跡取り等のすまい）は、下屋敷（国許からの物資の



荷揚げや蔵に用いる。あるいは別邸としての役割)は の記号により区別されています。

3. 大名や旗本の屋敷には、あわせて名前も記されていますが、その名前の向きが上下左右一定していません。これは、屋敷の門の方向を頭にして文字が記されているためです。

## 展示品目録

### 1. 御曲輪内大名小路絵図

金鱗堂尾張屋清七版。嘉永二(1849)年新鐫。慶応元(1865)年改正再版。

現在の皇居周辺(千代田区皇居外苑から丸の内、大手町の一带)です。江戸城には鶴と亀を描き、寿ぎを表しています。絵図の下部左右には、時代劇で有名な江戸町奉行所があります。また、下部中央からやや右よりに「細川越中守」とあるのが、肥後熊本細川家の上屋敷です。



### 2. 八丁堀霊岸嶋日本橋南之絵図

金鱗堂尾張屋清七版。文久三(1863)年再刻。



現在の東京駅の東側、隅田川に至るあたり(中央区京橋、八重洲、日本橋区域)までを描いています。絵図の中心からやや右上あたりに細川家中屋敷があります。また図の左端に見える八丁堀には、町奉行配下の与力同心の組屋敷が集中していたことは、ご存じのとおりです。

### 3. 芝口南西久保愛宕下之図

金鱗堂尾張屋清七版。万延二年改正新鑄。  
景山致恭図。

次は皇居から南へ東京湾に向かって下ったあたり、現在の港区周辺(芝公園、愛宕、新橋地域及び虎ノ門から麻布台にかけて)です。やや下の方に増上寺が大きな敷地を構えています。徳川家の菩提所として栄えた寺で、図中にも記されている「黒本尊」は家康が守り本尊として信仰を寄せた仏像です。



### 4. 小石川谷中本郷絵図

金鱗堂尾張屋清七版。万延二(1861)年改正。  
戸松昌訓図。



皇居から北に向かいます。現在の東京大学周辺(文京区本郷と周辺)の図です。絵図の下部中央、「不忍池」については、江戸時代の百科事典『江戸大節用』中に挿画として(雪景色の不忍池)描かれています。(別頁参照)

## 5. 雑司ヶ谷音羽絵図

金鱗堂尾張屋清七版。安政四年新鐫。  
戸松昌訓正訂。

図4から西へ移動したあたり、現在の文京区目白台周辺を描いています。図の下部を蛇行して流れているのが神田川。駒塚橋という橋のそばに細川家下屋敷があります。細川家に伝わる美術品などを保管・公開している永青文庫は、この下屋敷跡の一角に建てられています。



## 6. 東都小石川絵図

金鱗堂尾張屋清七版。嘉永七(1854)年(刻)。安政四年(1857)改。  
戸松昌訓著。



ほぼ図4と5をつなぐあたり(現在の文京区小石川周辺)を描いています。図の上部にわずかに「小石川御薬園」がかかっていますが、現在の植物園です。かつてはここが薬草園であったことは、よく知られているでしょう。右側やや上の伝通院は、家康の生母である於大の方が葬られた寺です。

## 7. 目黒白金図

金鱗堂尾張屋清七版。嘉永七(1854)年新刻。安政四(1857)年改正。  
戸松昌訓著。

現在の山手線目黒駅周辺の図。  
ここにも「細川越中守」の下屋敷  
があります。(数カ所あります。)



## 8. 芝三田二本榎木高輪辺絵図

金鱗堂尾張屋清七版。安政四(1857)年改正。景山致恭著。



図7から東にずれたあたり、品川を中心に南北に長く延びた形で描いています。松平隠岐守  
および松平主殿頭の中屋敷(画面北の方)あたりが、現在の慶応大学にあたるでしょうか。そ  
こから少し南に向かうと、細川越中守の中屋敷があります。

## 9. 本所絵図

金鱗堂尾張屋清七版。安政二(1855)年改正。文久三(1863)年改。

戸松昌訓図。



隅田川東岸。現在の両国国技館から東に広がる一帯を描いています。絵図上部左端に両国橋が書き込まれています。『江戸大節用』所収「両国橋之夕景」(別頁参照)も御覧下さい。

## 10. 本所深川絵図

金鱗堂尾張屋清七版。文久二(1862)年改正。

戸松昌訓図。

やはり隅田川東岸の一帯、「本所絵図」の描く範囲をそのまま南に移したあたり。東京都現代美術館を中心とした一角です。時代劇、あるいは時代小説の舞台としてよく取り上げられる場所です。

(解説 文学部教授 鈴木 元)



(参考展示：期間中特別展示)

『江戸大節用海内蔵(えどおほせつようかいだいくら)』(個人蔵)

高井蘭山編。文久3年(1863)刊行、「節用集」は江戸時代初期から昭和初期に多数刊行された漢字表記辞書の総称です。江戸時代の中頃からは、辞書部分に地図や作法、名前の付け方等の百科事典的な内容の付録を合冊する節用集が主流となります。付録重視の傾向は江戸後期にはさらに進み、幕末に刊行の本書では、この付録部分のみが独立した一冊をなしています。同時代の他の節用集よりも色彩豊かな口絵は辞典として的高级感の演出でもあったでしょう。

「不忍池」

画面左上には「不忍池 又篠輪津に作る、江州琵琶湖に比す、広さ方十町、江都第一の蓮池にして紅白の花開け、芬芳遠近の人の袂を襲ふ、四時遊観あるが中に、また雪中の気色比類なき絶景也」と記されています。



「両国橋之夕景」

画面左上隅には、「一両が花火まもなき光り哉」という其角の句が記されています。両国といえば花火で有名。芭蕉門の俳人其角の一句も、その一瞬のはかない輝きを写し取ったものです。

(解説 文学部准教授 米谷隆史)

では絵図の中の散歩を存分にお楽しみください。